

近代真宗教学の意義

藤原 正寿

現代様々な形で露呈してきている人間の存在を脅かすような問題の、根柢にあるのが自我の問題であるように思う。

日本に於ける近代は、その黎明期において、それまでの鎖国体制から脱却し、既に強固な近代的国家体制を確立している欧米列強に伍していく為の人材を養成していこうとする。この為に宗教は、教育の場から排除され国家に有益な実利の追及のみが教育の目的として位置付けられていくのである。これにより現代科学技術は目覚ましい進歩を遂げ、物質的な豊かさを享受するに至ったことは、否定しがたい事実である。しかしながらそれは、自我肯定の上になり立つものであるがゆえに、その中で苦しみ悩む人間の存在を挙げての問いには、充分に答え切れないものである。現代社会からの様々な問い掛けをみる時に、そこに経済・科学万能に根柢をもつ価値観とともに、それゆえに自己の存在の事実を確認できずに、何物も信頼できない人間の悲しみが浮き彫りになっているように思うことである。

帝国大学令は、近代化の促進を急務とする当時の日本に於いて、その要の大学として、帝国大学を位置付けている。その手本は、ドイツにあるのだが、「学術技芸を教授し、及びその蘊奥を考究するを以て目的とす」と規定されているように、大学を、専門教育の機能と研究的機能とを統合した上に立脚するものとしている。即ち大学は、一面に於いて小中学校の上に位置する最高の専門学

府であると共に、大学自体學術の研究機関たる使命を有するということである。つまり、絶えざる積み重ねによる奥底の研究と、その教授という二者同一としてその本質を形成するものなのである。ここに託されたことは、欧米に伍して行くための、日本の最高水準の教育が、此に於いて為されることを期待するということである。これと同じ文面によって、真宗大学が語られる時、もはや真宗大学は単に、「宗派内の僧侶」の養成機関ということに止まらず、一国の近代化の担い手となろうという志が、ここに伺える。さらに最も大切であると思われるのは、「国家」という言葉を、宗門に置き換えているという点である。当時の文部大臣森有礼は、教育の目的が、その全体が国家の為であるとする。つまり、帝国大学令は、皇国体制を補完するものとして教育を位置付けている。

これに対し、「宗門の須要に應ずる」という言葉で、いわば「宗門」のために、世界に充分通用し得るような水準の教育を期待する大学として、真宗大学を位置付けるのが、真宗大学令である。

明治三十三年（一九九〇）一月清沢満之は、「ソクラテス」と題して雑誌『無尽灯』に論文を掲載している。この中で満之は、「無一物の態度」をその基本的姿勢であるとしている。さらに「無一物の師、無邪気の弟子」による「問難往復」を以ての「事理」の「討究」によって確立されたもののみが、真に人を活かし、動かすような学びの要素となるのであるとしている。又ここで問われるべき問いは、「日常左右に接触する所の事物」「卑近なるもの」であるとしている。つまり人間の日々の生活、延いては生き様そのものが、真に問われるべきものであるというのである。教

育とは、一方的な知識の伝達「注入」ではない。そこにあるのは「死学問」であり、教育とは、人間の生そのものに「高遠の事理」つまり根本的意義を見出すことであると、満之は掘り下げるのである。

人間の生そのものに、根本的意義を見出すとは、いかなることなのであろうか。「如何に死すべきかを知るを、竟生の問題とす。」このことを身をもって後世に「示すことを実行したところに、満之は、ソクラテスの恩徳を語っている。つまり生死の問題に前向きになることが、人生に於ける究極的な問題であるということをも身をもって証していったところにソクラテスの意義を見出すのである。明治三十五年七月「精神界」に掲載された「生死問題」と題した論文の中で満之はさらに次の様に語る。

而して、彼の国家問題、社会問題を以て難解とするは、此の生死問題を混乱するが為にあらずや。(中略)是れ生と死とを峻別して、死を排して、生を貪らんとするの迷謬に基因するものなり。

ここに明らかに暴き出されているのが、我々に於ける最も根源的な姿ではなからうか。「生と死とを峻別して、死を排して、生を貪らんとすること」である。生きることへの無批判な肯定がそこに浮き彫りにされているのである。生を貪るという在り方は、死に対する怯えを、その裏にもっている。このことに前向きになり超克しないかぎり、社会問題も国家問題も根本的解決を見ることができないというのが満之の押さえである。これが根源的問題であるということとは、我々にとつて、最も触れたくない問題であるということである。しかしながらそれは逆にいえば、我々にとつて、最も切実かつ、具体的な問題でもあるということである。浩々洞

に於いて、問難往復されるのは、何であつたのであろうか。「日常茶飯に接するところの事物」「卑近なるもの」として現されるであろうそれは、パン問答である。パンの問題をどう解決するか、この一点に浩々洞の議論の中心問題はしぼられていたのであろう。パンの問題を問うところには、パンに執着しているところに引き起こされることに向き合つて生きていくことである。パンに執着する自己自身を知ることである。これが浩々洞の精神であり、精神主義なのである。曾我量深の伝える満之の精神主義についてのスピーチから次の様なことが知られる。いたずらに生を貪り、死を畏れる自己自身について真面目に向き合う、つまり無自覚な生の肯定の上に限りなく自己を主張していく我が身を見ることが、そこに自分も他人も人間存在そのものを疎外していく在り方が、見出されるとのことである。それゆえに、精神主義とは、このような自己の在り方が罪惡と自覚され、慚愧の表白をすることに他ならないといわれるのである。いうまでもなくこの表白は、単なる自己卑下ではない。積極的な自己の立脚地の表明である。そうであるならば、この浩々洞の精神、精神主義を具体的に依りどころとして、表明された開校の辞に於ける「宗教学校」「浄土真宗の学場」として確認される、他の大学と異なる一点は、この精神の有るか、無いかに関わることである。人間の理性に信頼を置き、展開していく近代以降の文明の潮流の中で、この只中であつて、自我に迷い苦しむがゆえに安慰を求める人間存在の事実を信頼し、この人間存在をどこまでも深く掘り下げるものとして学問を見出したところに近代真宗教学の意義があるのではなからうか。